

# 和歌山市森小手穂・寺内59・60号墳緊急調査概報

関西大学考古学研究室編



沙羅谷須恵器窯跡付近より、寺内59号墳（矢印右）同60号墳（矢印左）をのぞむ

和歌山市教育委員会

昭和43年3月

## 例 言

1. この概報は和歌山市教育委員会の依頼により、関西大学考古学研究室が行なった和歌山市森小手穂太郎ヶ谷所在の寺内59・60号墳の緊急発掘調査（昭和42年11月18日～12月5日）の調査概報である。
2. 古墳名は昭和42年3月出版の和歌山市東部地区埋蔵文化財（古墳）第一次分布調査概報（和歌山市教育委員会刊）によった。
3. この概報は調査事実を速報したものであるから、詳細な検討、考察は後日あらためて本報告で行なう予定である。その際、記述内容に若干の訂正を加える場合があるかもしれない。
4. 本概報は、末永雅雄・藺田香融・網干善教の指導のもとに、調査に従事した櫃本誠一・河上邦彦・奥田豊・笠井保夫・水口昌也が共同執筆した。

## 調査団の組織および参加者名簿

### 調査団団長

末永雅雄

### 副団長

藺田香融

### 参与

森浩一 網干善教

### 顧問

田中敬忠 松田茂樹 宮田啓二 中村正寿  
和高伸二 三尾功

### 調査団事務局

稲垣優 塩路保雄 平原陸奥 竹光健次  
田中輝夫

### 調査参加者

菅谷文則	櫃本誠一	山口隆	林一雄
市橋一男	岩本武之	西本隆旨	奥田豊
河上邦彦	笠井保夫	水口昌也	田中達夫
中井一夫	峯正明	久見由利子	山本紀美
岡田博	小川良太	吉岡哲	山本三郎
佐々木和子	松岡幸子	筏美多弥	

### 調査協力者

大野嶺夫

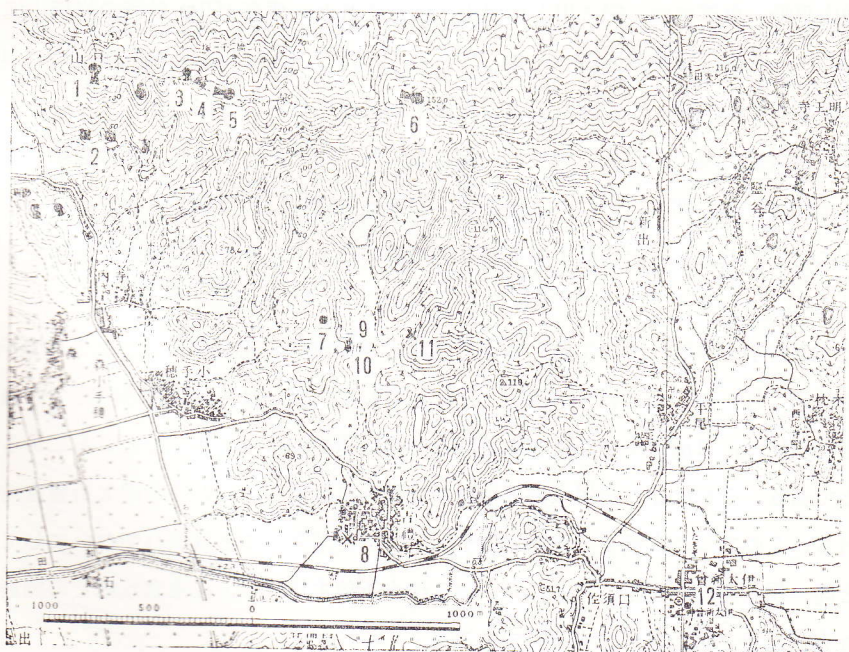
### 土地所有者

岡本直彦 坂口富夫 鈴木万延門

# 1. 調査の経過

10月19日和歌山市教育委員会より関西大学考古学研究室に、寺内59号墳・60号墳の開墾にとまなう事前発掘調査の依頼があった。すでに開墾予定日は目前に迫り、緊急を要すると判断したので数度にわたる打合せの結果、発掘調査に着手することに決定した。両墳は以下述べるように過去に乱掘を受け、内部構造は徹底的に攪乱され、59号墳では奥壁と右側壁の下部石積が、60号墳では羨道部石積の一部が残存していたに過ぎなかった。

調査は11月18日より草刈作業を開始し、翌日より外形測量に着手した。11月21日発掘を開始。両墳とも墳頂中央部にくぼみがあり、南に向かって延びていることにより、内部主体を横穴式石室と推定し、乱掘曠に従ってトレンチを設定する。11月22日に59号墳の排水溝を検出する。60号墳は墳頂下1.5mの地点で石材の散乱状態を認める。11月25日に至り、59号墳は玄室右側壁及び奥壁の一部を検出し、ほぼ本石室残存の石組状態全容を確認する。11月28日、59号墳は石室床面精査中、奥壁部で新たに金環1個と管玉1個を検出する。60号墳は玄室部における排水溝を確認する。12月1日、59号墳で石室構築土壙を認



第1図 寺内59・60号墳の周辺 (図の上が北)

1. 大日山35号墳
2. 井辺1号墳
3. 郡長塚古墳
4. 知事塚古墳
5. 將軍塚古墳
6. 天王塚古墳
7. 寺内57号墳
8. 吉礼繩文式遺跡
9. 寺内59号墳
10. 寺内60号墳
11. 沙羅谷須恵器窯跡
12. 伊太祈曾神社古墳

め、石室石組との関連について調査する。60号墳は堀状を呈する部分の調査を行なった。12月5日、59号墳は石室床面と地山との関連を調べる。60号墳も各トレンチの土層図を完成し、すべての実測を終了する。以上をもって11月18日より12月5日にいたる通算18日間の現地調査を終った。

## 2. 古墳の位置と環境

寺内59号墳・60号墳は、和歌山市森小手穂字太郎ヶ谷1522、1523番地の地籍にあり、南海電鉄貴志川線吉礼駅の北方約1.2kmの丘陵地に位置する。両墳は岩橋山塊より南へ多数派生する一尾根の山腹にあり、標高約40mの地点に所在する。両墳が位置する派生尾根の小ピーク、すなわち、両墳より西方約150mの標高86.7m地点には、径28mを計る大型円墳と推定される寺内57号墳（通称高塚）が存在する。この派生尾根の東へのびる斜面が急傾斜より緩傾斜へ変る地点に、尾根稜線とはほぼ平行して、寺内59号墳、60号墳が南北に並列している。又両墳より東方約400mの丘陵西斜面には、六世紀から七世紀にかけて使用されたと考えられる沙羅谷須恵器窯址が存在する。

和歌山平野の東部には、紀ノ川と和田川にはさまれた、標高150m前後の岩橋山塊が東西に連なり、その山頂や斜面のいたるところに、五百数十基に及ぶ岩橋千塚古墳群が営まれ、今回調査の寺内59・60号墳も広義の岩橋千塚に含ませることができる。しかし岩橋千塚の多くは岩橋山塊の北斜面に集中し、南斜面に散在的に分布する数十基の古墳については実はそれほどよく判っていない。本古墳の調査は岩橋丘陵の南斜面における古墳の様相を明らかにするものとして、岩橋千塚古墳群を理解する上に、きわめて重要な意味をもつものといえる。

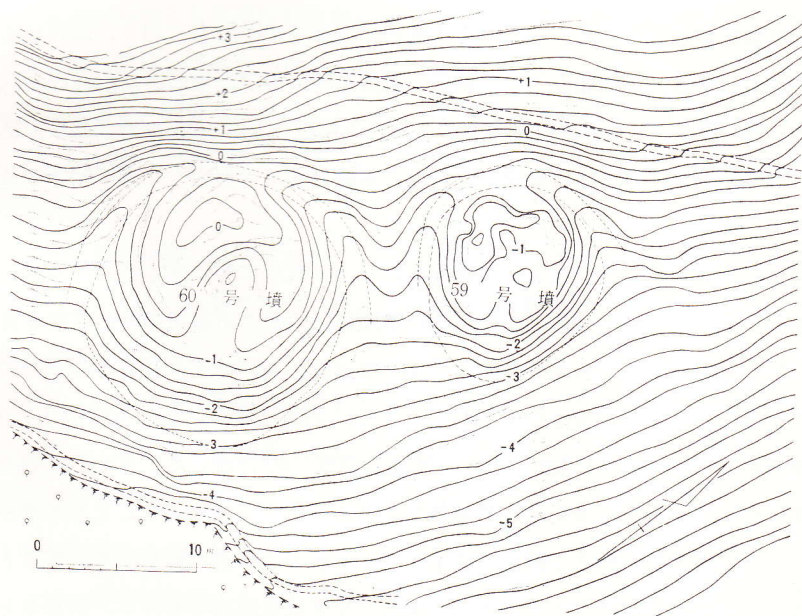
付近の考古学的環境については、さきに関西大学考古学研究室が刊行した『岩橋千塚』（昭和42年3月）にくわしいが、今、とくに注意したいことは、本古墳の所在する森小手穂・吉礼の地は、日前宮を中心とする地域と、生活環境的にやや距ったところにあるということである。それはむしろ伊太祈曾神社に地理的に接近し、いわゆる伊太祈曾盆地の入口に当る。この二つの古墳を広義の岩橋千塚に含めて考えることは誤りでないにしても、卒然と同一視しえない理由である。いわゆる伊太祈曾古墳群や、山東窯址群との関連についても充分注意を払わねばならないであろう。

### 3. 調査の概要

#### (1) 寺内59号墳

寺内59号墳の周辺はすでに開墾され蜜柑畑となっており古墳の存在する付近だけが雑木林として残されている。古墳は南北径11m、東西径12m、高さ西0.6m、東2.5mを計測することのできる円墳である。いわゆる山よせの円墳であるため周囲に馬蹄形状の堀状地形を有している。墳形は乱掘を受けているにもかかわらず築造時の状態を良好に示していると思われたが、試掘壕を入れた結果では、現在の空堀状地形の底より約0.6m 築造時には深かったことが確認され多量の封土の流出が考えられる。埴輪は封土中に破片数個を検出したが、埴輪列は検出されなかった。葺石の使用は全く見られなかった。

内部構造は墳丘の中央に構築された、ほぼ南東に開口する岩橋千塚通有の結晶片岩の割石を小口積にした横穴式石室である。しかし採石を目的とする乱掘のため、石室は全く原形をとどめておらず、かろうじて玄室の奥壁と側壁の下部石組一部分のみが、築造当時の状態を保ち残存していたにすぎなかった。今回の調査で石組の裏側の状態を精査することが出来たが、石組の裏側では裏込石はみられず、石組に近接して検出されたコ字形の石室構築のための土壙との間に、封土とは異なる土を入れただけであることがわかった。また隅部の構成は、奥壁石組の一辺と同じく側壁の一辺を接して直角をなし、隅柱的な石材を



第2図 寺内59号, 60号墳, 墳丘実測図

用いず、最も単純な形で奥壁隅部を形づくっている。極めて簡単な構造に驚かされた。なおこれら下部石組石材は奥行き30cm程度で極めて短いことが目立つ。石室の残存状態が非常に悪かったにもかかわらず精査の結果、石室内に敷きつめた粘質土の存在により玄室の規模は、長さ約2.25m、幅2mと推定することができた。羨道については確認することができず、玄室前道、前室等の存在も不明である。排水溝は奥壁中央より始まり、推定羨道部に向かって3.13m伸びており、その構造は板石をV字状にし、蓋石を架けたものである。ただ奥壁から玄室中央の約1mの間は板石の存在がなく、玄室の床にU字状の掘り込みがあるのみであった。

遺物は盗掘により、大部分が失なわれているものと思われるが、それでも若干のものが残存していた。しかし原位置を保っているものはほとんどなく、ただ残存石組に接して検出した2・3の須恵器だけが原位置を保っていると考えられる。出土遺物としては、金環が奥壁中央左より付近と玄室中央から検出されたが、これらは別個体である。ほかに管玉が奥壁中央付近より、出土している。玄室内には須恵器、土師器の破片が散乱していた。推定羨道及び羨門付近には須恵器子持壺の子壺1個と須恵器片、土師器片が検出された。鉄製品はまったくみられなかった。なお封土中より土師器杯1個と、埴輪片の出土をみた。

## (2) 寺内60号墳

寺内60号墳は、寺内59号墳の同一緩傾斜面上南10mに位置し、雑木林として残されていた。古墳は南北径16m、東西17m、高さ西0.3m、東3mを計測することのできる円墳である。墳丘は、墳頂に乱掘墳があり大きくくぼんでいた。斜面に築造するため斜面高方を大きく削り墳丘を画している。その結果馬蹄形の堀状地形ができており、現状底幅約1mを測ることができる。試掘墳を入れた結果、築造当時の堀状地形の底は現在の堀状地形の底より約0.9m深く、封土の流出が相当あることを確認した。墳丘の断面観察の結果封土が石室の築造面を境にして土質が違い、石室の基礎として下部の土を固く叩きしめていることがわかった。

内部構造は墳丘の中央やや東よりに構築され、ほぼ南東に開口する結晶片岩の割石による小口積みの横穴式石室であるが、寺内59号墳同様採石のため築造当時の状態を保っておらず、ただ玄室の最下部の石が部分的に、また羨道及び羨門の下部石組が部分的に残っているにすぎなかったが、石室の規模が確認できた。石室全長7.8m、玄室幅2.2m、長さ不明、羨道幅1.2m、長さ1.9mである。羨道右側壁に約17cm石室が石室外に向かって突出した部分があり、袖部と考えられ前室が存在する可能性を考慮することもできる。玄室奥壁中央から玄門中央にかけて板石を使用したV字状の排水溝が長くのび、長さ7.2mを計測することができる。さらに玄室内では床面にV字状の掘込みを作り、割石をくいだいた砂を投入しただけの排水溝が中央の排水溝と2本直交しており、1本は直角に支溝が伸び

ている。また奥壁の石組の下部に中央の排水溝と直交する形で掘込みが検出され、石室外の排水施設と考えられる。玄室中央より右側には、こぶし大の河原石が長さ1.8m、幅0.8mの範囲に敷いてあり、その下部に板石がほぼ同範囲にならべてあった。しかもその周囲には、推定右側壁側を除く他の3辺からは掘込みが検出され箱式石棺の存在していたことが推定できる。

遺物の出土状態は玄室中央左よりに鉄刀1口、推定左側壁にそって鉄鏃2本が床面に接して出土した。玄室内部及び羨道部の攪乱土中より須恵器杯身3個体分、杯蓋1個体分と土師器、須恵器片及び鉄片3個を検出した。墳丘北側の堀状地形の底より須恵器十数片を検出した。なお、墳丘南裾付近より石斧の出土があり、断面観察により封土中に混入していたものと断定した。

#### 4. ま と め

今回の調査の対象となった2基の円墳は、いずれも過去に石材の採取を目的とする乱掘を受け、古墳の内部構造は徹底的に破壊されつくしていたが、調査の結果、わずかに原形のおもかげをとどめていることがわかった。ここでこの2つの古墳について知ることのできた点を要約すれば次のごとくである。

- (1) 寺内59号墳は、11m×12m、同60号墳は16m×17mの円墳で、葺石はない。
- (2) 内部構造は両墳とも結晶片岩の割石を小口積にした横穴式石室であり、いずれもほぼ南東方向に開口していたと推定される。
- (3) 玄室の規模は、59号墳2.25m×2.0m、60号墳?×2.2mで、これに羨道が附随していた。玄室前道・前室等の存在については明かでない。なお両墳とも排水溝の設備を有している。
- (4) 石室の床面は粘質土でつきかためていた。60号墳では、玄室の一部に河原石を敷いた部分があり、この一画を囲む箱式石棺の存在が推測された。
- (5) 出土遺物としては、  
59号墳……金環2、管玉1、須恵器子持壺の子壺1、土師器杯1、その他  
60号墳……鉄刀1、鉄鏃2、須恵器杯3個体分、その他  
なお59号墳では攪乱土中より埴輪片ごく少数を採取した。

かように本古墳の内部施設は、ほとんど消滅していたが、今回の調査によって、岩橋千塚の他の古墳の調査では知ることのできなかつた新知見の発見もあった。以下そうした成果の2、3について述べよう。



- (1) まず、地山と墳丘との関係について貴重な示唆が与えられた。この2つの古墳は57号墳の所在する丘陵が、東に急下降する傾斜が、標高40m付近で緩傾斜に変換する地点に位置するが、古墳を縦断する深いトレンチを入れた結果、墳丘の形成に当って、山側の土を馬蹄形状に掘り取り、盛土を行なったことがわかった。
- (2) 過去の乱掘のため内部の石室の構造は基底部分のごく一部を残すにすぎなかった。しかし、そのおかげで、石室の石組構築の手法を詳細に観察することができた。割石の小口積の裏側には、粘質の土を充填しただけで裏込めの石はなかったこと。隅角の石組もいたってかんたんなものであること。これらは岩橋千塚に通有の横穴式石室の構築手法を理解する上で、きわめて有益であった。
- (3) 石室の構築に当っては、地山を水平にならし、その上に少量の盛土をしきかため、石室を構築していったことがわかる。側壁の下部には、簡単な水抜き設備もみられた。

これらの新知見については、いずれあらためてくわしく述べる予定であり、本古墳の岩橋千塚古墳群に占める位置づけ等についても、その機会にゆずりたいと思う。

この2つの古墳の構築年代については、なお充分明らかではないが、検出された須恵器が、畿内編年（森浩一氏）の第Ⅲ形式から第Ⅳ形式に、比定されるものであることを指摘するにとどめる。



(1) 59号墳玄室内遺物出土状態



(2) 60号墳石室及び排水溝

昭和43年3月30日 印刷・発行

編著者 大阪府吹田市千里山  
関西大学文学部考古学研究室  
代表 末 永 雅 雄

発行所 和歌山市西汀町一番地  
和歌山市教育委員会

印刷所 大津市松本一丁目8の17  
堤 印刷所